

松代大本営跡地から見る、 21世紀の平和

移動第1分科会

磯野紀子((企)労協ながの)

9時に長野駅東口をバスにて出発。松代象山神社駐車場で東京高齢協のバスと合流。徒歩で象山地下壕へ移動途中、地下壕のある山並みを紹介。入り口近くで、報告・案内の長野俊英高校の郷土史研究班の高校生6人が歓迎のパネルをもって出迎え。

松代大本営地下壕跡地に入る

長野俊英高校郷土研究班の報告

私たちの先輩が20年前に沖縄に行ったとき、戦時中病院として使われていた「ガマ」を見学した。地元松代にも同じようなガマがある。B29の10トン爆弾の落下にも耐えることのできる山の中の丈夫な岩盤を掘ってつくられていた。入ってはいけない事になっていたが入り口を見つけ入ってみたことからこの活動がはじまった。10年前から一般公開を目標にして実現した。

工事方法の説明

まず、清野(地名)側の山の斜面に木でやぐらを組んで、地上から数mの高さから穴を開けて掘り始めた。たくさんの土砂が出るので、片づけられるようにスペースを広く取ったが、やぐらはすぐに土砂で埋まってしまった。神山側からも同様に掘った。

工夫がダイナマイトを仕掛ける穴を開ける仕事をしていて、岩に穴を開ける削岩機を

使っていたときに、削岩機が途中で折れて60年以上も岩に突き刺さったままになっているものもある。まず、岩盤にダイナマイト用の穴を5箇所開ける。そして、発破師がダイナマイトを仕掛ける。不発弾が分かるように導火線の長さを変えて爆破の時間をずらす。爆破させる時はあわてて岩陰に隠れたが、ものすごい勢いなので、たくさんのけが人や死人が出た。爆破で四角い穴を開け、縦横2.7mになるように広げた。1回の爆破で1.5m、1日3~4交替で4~5m進んだ。湧き水対策に、100m進むごとに1m高くなる勾配をつけた。

トロッコ押しは、岩くず(ずり)をトロッコに乗せて運び、整理場で櫓の上から捨てる。米軍機が上空からたくさんの岩くずを見つけると何をしているか分かるので、木や葉っぱを掛けて隠した。夏はすぐ枯れてしまうので、地元の小学生まで動員した。朝鮮人7000人、日本人3000人の1万人が働いた。朝鮮人は特に危険な作業をさせられて、非常に多くの犠牲者が出た。

発破師の朝鮮人チェサムさんが体験を証言してくださった。「ある時、仲間が事故にあったと聞いて急いで駆けつけた。事故後、煙の中で仲間を探した。現場は血の海で肉片が散らばっていた。肉片を集めたが、人間の一番大切な部分の頭がなかなか見つから

- コーディネーター 田島隆 (NPO 法人ひとミュージアム上野誠版画館)
- 地下壕案内 長野俊英高校郷土研究班
- 憲法9条朗読 生活協同組合東京高齢協朗読劇団「八月座」
- コメンテーター 馬場修 (NPO 法人松代大本営平和祈念館)

ない。あきらめていたところ、上から生暖かい血がぼたぼたと落ちてきて、カンテラで照らすと岩と岩の間に頭が挟まっていた。髪の毛を引っ張ったが、栄養状態が悪く髪の毛がするすると抜けた。仲間に肩車してもらい、岩の隙間に手を入れて抱きかかえるように頭を引っ張り出した。その時、ずしりという重みを感じた。人間の頭というものこんなにも重いものかと思った。」

チェサムさんは、戦争とはこんなに悲惨なものなんだという事を僕たちに語り継いでくれた。この地下壕では、大勢の朝鮮人と日本人2名が亡くなった。朝鮮の人と地元の人との間には交流もあった。しかし、朝鮮人に対してひどい事が行われたことは事実である。松代は弱い者が犠牲になるという戦争の本質が見える場所だと言われている。皆さんもこの地下壕で戦争の犠牲になられた方の気持ちを考えながらこの先見学をしてほしい。

奥に進み説明

山の中を掘って大本営をつくるとたくさん岩くずが出るのは想像できると思うが、ここ松代には岩くずが残っていない。一体どこに行ってしまったかという、長野県の国道の下土に使われたそう。しかし、使われたのは全体の一部。それでは大部分は



どこに使われたのか。実は外務省や国土交通省のある東京霞ヶ関一帯の下土に使われたそう。今、従軍慰安婦や強制連行に関して日本の責任が問われているが、残念ながら、わが国はドイツと違って戦後保障をほとんどしていない。下土の中には、亡くなった朝鮮人労働者の遺体や遺骨も混ざっているという話もある。なぜ、松代大本営建設に出た岩くずをわざわざこんなところに使ったのか。終戦の時に、日本を占領したGHQ連合総司令部に日本の道路は駄目だと言われ、それならもう一度舗装し直そうと考えて、どこかにいい下土がないかと探したところ、たまたま松代にあった。電車等を使って東京に運んだらしい。この話を聞いた東京の人は、あの付近を通るとき、気が引けてしまうとおっしゃっていた。このことを考えると歴史の悲劇を感じると思う。

地面にある小さな窪みは、トロッコの枕木の溝跡。はじめは、トロッコがレールから外されないようしっかりと固定するために

掘られたものと考えられたが、松代大本営は突貫工事だったので、そんな暇など無かったはず。それではなぜ溝はできたのか。もちろんトロッコの重みで枕木が沈んだということもあるが、ずりを満載したトロッコを何千回、何万回と押して行った結果、トロッコのずりがくずれ落ちて積もり、枕木を埋めてしまった。これを見ると工事の膨大さ、大変さがよく分かる。

厳しい労働の中でもこんな明るいエピソードもある。トロッコ押しをしていた旧制屋代中学、今の屋代高校の生徒で、当時この工事に動員されていた方の証言によると、トロッコ押しは2人でやる仕事で、1人は日本人でもう1人は強制連行されてきた朝鮮人だった。その朝鮮人の青年は、ずりを捨てて空っぽになったトロッコに彼を乗せてくれたそうだ。話や交流を一切してはいけないと上からきつく命令されていたが、壕の末端までは監視の眼は届かない。強制連行されてきた朝鮮の青年から見れば、学生の彼のことが故郷に残してきた自分の弟のように見えたのかも知れない。

ここに韓国の第三の都市「大邱^{テグ}」という文字が書かれている。朝鮮の人々は、8月13日になると日本が戦争に負けると分かり、もう働かなくなってしまったので、おそらく

それ以降に朝鮮の人々が書いたものと思われる。どんな想いで書いたのか。暗いトンネルの中で仲間がどんどん倒れ、いつ開放されるか分からない辛くて長い日々。でも戦争が終わり、これでやっと自分たちの国へ帰れるという望郷の想いで書いたのではないだろうか。

ここに顔の絵もある。兵隊に見えるが、かつて案内した在日の方が、朝鮮人が朝鮮のお祭りの時の帽子をかぶっているのではないかと saying していた。早く故郷に帰ってみんなでお祭りをやりたいと思って描いたものかもしれない。

長野俊英高校土屋教頭のお話

これまで20年間、高校生がこの取り組みをしています。彼らは3年で交替していきまますから、3年間の経験では全ては分かりませんが、嬉しいことに、私を追い抜いていくような生徒もいます。松代工事を体験したり見聞きしたりしたお年寄りの方は、自分の孫くらいの高校生には気楽に話してくれます。大人が聞きに行ってもなかなか話してもらえませんが、高校生がやっているからということで情報をいただけるようです。

平和に関心のある大人たちと戦争を知らない生徒たちが一緒になって、行政にはたらきかけて松代大本営の保存が実現したことは、日本だけでなく世界でもあまり例のないことです。高校生は学んだことだけしか話しません。価値を押し付けることはない。史実だけを伝えて、あとは皆さまに考えていただきたいと思っています。

質問

・生徒さんはこういうことに取り組んでどう



思っているか。

先輩たちが非常に真剣に、そして一所懸命にやっているのを見て、憧れて始めた。最初はゴミ拾いや案内をしていて、どうしてこういうことをやっているのか意味が分からなかった。しかし、朝鮮の人がこんなに大きなものを掘って、異国の地で亡くなったということを知って、もし同じことが自分の身に起きたらどんな気持ちになるか考えた。今では、この事実を自分一人の中で埋もれさせるのではなくて、感じたことをもっと多くの人に伝えて考えてもらいたいという使命感をもっている。

・活動を通して何か変わったことはあるか。

戦争について教科書で習っているだけでは、ほんの数ページ分の内容しかないが、こういう活動をしていると人々の苦しみや怒りが伝わってくる気がする。

お礼の言葉と大きな拍手で締めくくられた。
バスにて移動、「ひとミュージアム」へ

「ひとミュージアム上野誠版画館」を田島館長の説明で見学

上野誠は、1931年に東京の美術大学へ入学しました。満州事変の年でした。その頃、大学では反戦運動をやっている、学内民主化運動をしたり、労働運動に携わったりしていた学生は退学になり、つぎつぎと警察に捕まりました。上野は自分も危ないと思って、部屋の物を焼いたり処分したりしましたが、やはり捕まってしまう。

上野警察の豚箱には、スリや泥棒や強盗がたくさんいて、「なぜ捕まったのか正直に言え。」と言われて話をしました。そうすると、「みんなよく聞け、今度来たやつは俺ら

とはちょっと違うぞ。俺たちはかたぎの人に迷惑をかけてきたが、こいつは国のためを思って入ってきたんだから、俺たちの兄貴分だ。大事にしろ。」と言って大事にしてくれました。しばらくすると、警察に呼び出されて拷問にかけられました。気絶して水を掛けられて、その次に爪と指の隙間に竹のへらを突き刺されました。最後は這うこともできなくなりました。豚箱に戻されると泥棒たちが寄ってきて、「知っていることを吐いたのか。」と聞かれ、上野が吐かなかったとわかると、とても大事にしてくれて、トイレは抱いて連れて行ってくれました。

上野は退学になった後、長野に帰り、版画の勉強をしました。版画の基礎を学びました。ある時、中国人の画学生が、お土産に自分の版画集を上野に持ってきました。その版画集の序文を魯迅が書いていました。魯迅が序文を書くような画家は相当の人だと思って、彼に自分が確信を持っていた作品を見せました。その作品は、上野が満州から帰った時の光景を、こんなことが許されるわけがないと憤慨して版画に彫ったものでした。軍人たちが近所の人たちを集めて、「俺たちは満州でこういうことをしているんだ。」と言って、後手の人をずらりと並ばせ



て首を切るところです。生首もあるし、中には女性の首もあります。さらにそこには日本帝国主義、戦争絶対反対とありました。その中国人の画学生は感激し、2人は生涯の友となりました。

その後、上野は戦前は学校の教師をしながら過ごし、戦後は戦争反対の版画等を彫っていました。広島原爆を経験した人が上野駅で原爆の話をしていたので、上野はその人のケロイドの足に触らせてもらったことがあります。そのときの手の感触が忘れられず、それから原爆の絵に没頭しました。長崎へ行って、原爆病院に入っている人と交流したりしました。最初は何も話してもらえませんでした。仲良くなるうちにぼつぼつと苦しい話をしてもらえるようになったそうです。それを61枚の小さな版画の作品にしました。

そのうちに、大変仲良くしていた被爆者が亡くなりました。苦しい苦しいと言って亡くなりました。悲しみに暮れている時、上野の頭の中で鳩が苦しみながら舞いました。それをスケッチしたのが「瀕死の鳩」です。「羽ばたき」はそれから後に描きました。そして、鳩と原爆を2つの柱にしながら生涯を送りました。今から20～30年前、平和委員会から平和年賀はがきが出たことがありま



すが、それに鳩が登場しています。また、原水爆禁止世界大会のポスターにもなっています。

一生を平和のために捧げて絵を描いた上野誠。この近くで生まれた人の中にそういう人がいたということが嬉しくなって、このような美術館を開きました。

見学後、近くの公民館へ移動

「八月座」日本国憲法九条朗読

120年前の11月1日に秩父事件がおきた。終焉の地長野で、明日を夢見て時代の峠を越えていった若者たち、長い間暴徒と呼ばれ、世間から隠れるように暮らした遺族たち、彼らを偲んで秩父弁で朗読された。朗読者は、もんぺに割烹着、姉さん被りのいでたちの神林千代さん。その後、東京高齢協の13名が朗読を披露した。



松代大本営平和祈念館理事長馬場修さんの見学後の報告

- ・ 松代大本営地下壕の持つ意義
- ・ 保存運動の経過
- ・ 現状と問題
- ・ 今後の課題

「ひとミュージアム」の田島隆さんのスライドを使った解説

- ・ 上野誠の画業と生き方 現代に生きる価

値

- ・ 版画館建設の経緯
- ・ 現状と課題

交流では、佐久地域で憲法九条を守る平和運動を準備している女性から、どのように組織していけばよいかという質問に、できるだけネットワークを使って多くの人に呼びかけることをアドバイス。時間になり、今日見たこと、聞いたこと、感じたことを胸に、各自が明日から発信し行動することを確認し、帰路につく。

参加者の感想

- ・ 地下壕を歩いて見たことと、若い高校生の真剣な姿に感銘を受けました。上野誠は実際に知りませんでした。こんなに近くに素晴らしい人がいた事を誇りに思いました。
- ・ 私達の沖縄では今も戦争に出かける米軍が頭上を飛びまわっています。大学の構内にも落ちました。憲法九条は絶対に手直ししてはいけないと心にちかいました。私達日本人が、くさい物にふたをしていては永遠に終わりません。
- ・ 戦争について学校でもあまり時間をさいて学習させられた訳でもなく、まして体験者も周りに少なく、これまであまり戦争やそれがもたらす影響など、深く考えたことはありませんでした。でも、最近ではイラク戦争などで、これでいいのかという疑問が自分の中に生まれて、何ができるのか考えていました。今後どう関わっていけばよいか、少し分かったような気がしました。
- ・ 説明している高校生の感想で、「活動をはじめた時だまされたと思ったが、やっていく中ですばらしい事だと感じはじめた。」私はこの一言に本当に感激した。
- ・ 長野県に住んでいるのに松代大本營に来たことがなかったので、ぜひ来たいと思っていました。戦争遂行の為につくられた地下壕を見学し、戦争のあやまちを強く思い、強制連行された朝鮮労働者のことも強く心にのこりました。高校生が、次の世代に続く活動をしていることを知り感動しました。来てよかった。

